

部落問題文芸・作品選集

第45卷

河竹默阿弥著

黃門記童幼講釈 上卷

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第45卷

定価は箱帯に表示

昭和五三年五月八日発行

定価 二二〇〇円

発行者

松本富夫

発行所

株式会社
世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五丁152

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七二三)九二四四

振替 東京 四―七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

黄門記童幼講釋

(黄門記 七幕十七場)

序 幕

神田明神境内の場
御船藏向川岸の場

〔役名〕柴田軍兵衛、星坂九郎次、堅井郷藏、織田の中間ぐづ八、同づぶ六、稻波の中間茂九助、職人半間の兼、風呂屋藤助、髪結七藏、比丘尼宿勘七、夜鷹宿九助、夜鷹鼻くたお八重、益田の娘撫子、同母おみさ、茶見世の娘お梅等。〕

〔神田明神境内の場〕本舞臺中央に石坂、上の方家根附の茶見世千代田といふ掛行燈、正面障子閉切り、見世に銅壺附の竈茶釜を載せ、水瓶茶道具一式よろしく並べ、舞臺へ掛床几二脚並べ、下の方一面に石垣大樹の松、總て神田明神境内の體、爰に藤助、七藏、勘七、九助何れも羽織着流し町人のこしらへにて、床几へ腰を掛け煙草を呑み居る、お梅茶屋女のこしらへにて盆へ茶碗を載せ茶を出し居る、此の見得臺拍子にて幕明く、

お梅 はい、どなた様もお湯をお上りなされませ。

藤助 いやア、これは香煎と思ひの外、櫻湯とは珍らしいな。

七藏 櫻は花の王といふが、鹽に漬けても好い匂ひだ。

勘七 今日はまだ酒を呑まぬが、酔醒めなどには、このことだね。

九助 いや、櫻といへば丹後前の櫻風呂は、大そう流行るね。

藤助 櫻風呂の流行るのは、第一家の普請が好く、

七藏 世辭がよいのに手當がよく、取りわけ湯女がみんな好く、

勘七 中にも小富といふ湯女は、器量が好いのに程がよく、

九助 何から何までい、もの盡し、お客の多いは尤もだ。

お梅 その小富さんといふ湯女は、よく三日に明神さまへお詣りに参りますが、女てさへも私などは惚

惚いたしますから、小富々と皆さんがおつしやる筈でござります、水商賣に似合ひませすいた

つて堅い心ゆゑ、色が出来たといふ噂を、まだ承りませぬわいな。

藤助 あの小富といふ湯女には、小石川の御家中で藤井紋太夫といふお方が、大層惚れてござるさうな。

七藏 よくお前知つて居なさる、其の紋太夫さまには先達て、織田さまの公用人、

勘七 當時お屋敷の羽振のよい黒崎伴右衛門様と御一緒てお目にかゝつたことがある。

九助 その小富といふは、軍兵衛さんの所へ商ひに来る、魚賣の妹だといふことだ。

お梅 おつしやる通り小富さんは、三筋町の魚賣久五郎さんの妹になつて居りますが、實は伯母の娘

ゆゑ從兄妹同士でござります。

藤助 どうして委しく知つて居なさる。

お梅 はい、わたしは近い頃まで三筋町に居りましたから、よく存じてをりますわいな。

藤助 はて、三筋町に居なすつたとか、それでは知つて居る筈だ。

七藏 それはさうとして、軍兵衛さんは、もう來なさりさうなものだ。

勘七 かたぐゝ爰で待合す約束なれば、違ひはないが、

九助 大方織田のお役人衆と一緒に爰へござるのだらう。

藤助 お役人衆と一緒に、何時ござるか知れないから、斯うしてゐるうち明神さまへ、お参り申して來ようではないか。

七藏 お、それが好いく、よい額が上つたといふから、額堂へ行つて見て來ませう。

勘七 もし姐さん、今爰へわたし等を尋ねて來た人があつたら、

九助 お参りに行つたと言つて下さい。

お梅 はいくゝ畏まりました、左様申しますでござります。

藤助 それぢやあ皆さん、出掛けませうか。

七藏「御一緒に行きませう。(ト四人立掛る、)

お梅「御ゆるりとして行つていらつしやいまし。

ト臺拍子になり四人石段を上り奥へ入る、お梅茶碗を片付け内に入る。右の鳴物にて花道より豎井郷藏羽織袴太刀、柴田軍兵衛羽織着流し一本さしにて連立ち出來り、花道にて、

郷藏「こりや軍兵衛、その方から口入の、願ひ事のある町人共は、何れへ參つて待つて居るのぢや。

軍兵「千代田と申す茶見世へ參つて、あなた方のお出でをばお待ち申して居りまする。

郷藏「それでは千代田へ參つて居るとか、

軍兵「お重役の黒崎様は、今日はおいてがござりませぬか。

郷藏「伴右衛門殿はお上の御用で、今日は他出が成り兼ねるゆゑ、身共一人で參つた。

軍兵「へえ左様でござりましたか、何にいたせ向うへ參つて、

郷藏「お、ゆつくり願ひを聞いてやらう。(ト臺拍子にて兩人舞臺へ來る、)

お梅「これは豎井さま、よくいらつしやいました。

郷藏「此間は夜を更し、大きにそちの世話になつた。

お梅「どういたしまして、夜更し所かまだ九ツでござりました、そんな御遠慮をなさりませずと、どう

ぞいらつして下さりませ、外のお客さまと違ひまして、御大老様のあなた方ゆゑ、世間へ見得になりますわいな。

郷藏 その様なうまいことを言つて、蔭で鹽花をふらうと思つて、

お梅 何でもそんなことをいたしませうかいな。

軍兵 時にお梅さん、わたしを尋ねてお前の所へ、四五人連れて來させなんだか。

お梅 今しがたおいてなさいまして、お待ちなされてございましたが、おいてのない内明神さまへお参り申して來るとおつしやつて、おいてなされてござります。

軍兵 それではお参りに行きましたか。

お梅 先づお茶をお上りなさりませ。(ト兩人へ茶を出す、郷藏茶を呑みながら)

郷藏 いやなに軍兵衛、久しい馴染の貴様の筋を聞いてやるが、實に黒崎氏も身共も頼まれごととてはつとする、爰へ芝居をこしらへたいとか、彼處へ遊女町を取立てたいとか、種々雑多なことを頼みに参り、さてく五月蠅ことではある。

軍兵 そのお五月蠅のも存じながら、願ひ事のお取次に度々お宅へ上りますも、あなた様と御懇意を人が知つて居りますゆゑ、つい頼まれては上ります。

郷藏 いや貴様などは舊來の馴染ゆゑに取次ぐが、身共と違つて重役の黒崎氏は取家ゆゑ、贈り物の高下によれば、其の邊は承知であらうな。

軍兵 それは仰せがござりませすとも、ずつと承知でござります、それについても皆の衆が早く來てくれ、ばよいが、

お梅 ちよつとお迎ひに行つて参りませうか。

軍兵 お、御苦勞ながら行つて下さい。

お梅 畏りましたわいな。(トお梅石段を上り奥へ入る。)

郷藏 いや、今も言ふ貴様とは古い馴染の身共ゆゑ、決して禮には及ばぬが、黒崎氏は何事も直に御前へ申し上ぐれば早く禮をするがよい、一兩日のその内に先づお定りの鯛が一折に御酒代として何程か、目録を附けて持つて行きやれ。

軍兵 へい、畏りましてござります。私が願ひ立の富が御免になりますれば、月々儲けの其の内から二割はお禮に差上げますから、どうかお執成しを願ひまする。

郷藏 身共は承知いたして居るが、公用人の黒崎氏がうんと言はねば出來兼ね、今も申した使ひ物を早く持つて行つてくりやれ。

軍兵 畏りましてござりまする、三筋町に久五郎といふ好い魚屋がござりますから、早速それへ申

し附け、持つて上りますでござりまするが、御酒代はどの位上げたものでござりませう。

郷藏 それは幾らといふ定りはないが、成るたけ力を盡すがよい、多い方はどの位多くツても大事な。

軍兵 へい、畏りましてござりまする。

郷藏 黒崎氏は別段だが、身共に禮は及ばぬぞ。

軍兵 へい、畏りましてござりまする。

郷藏 然しそこらは其の方も、如在不男ゆる心得て居るであらうな。

軍兵 へい、畏りましてござりまする。

郷藏 禮は品よりなまの方が、いやさ、生魚が何よりだぞ。

軍兵 へい、畏りましてござりまする。(ト臺拍子にて石段よりお梅先きに以前の四人出來り)

お梅 はい、皆様をお連れ申しましてござりまする。

軍兵 お、御苦勞々々。

お梅 御用がござりますならば、お呼びなすつて下さりませ。(ト茶見世の内へ入る。)

藤助 軍兵衛さま、さつきからこれへ参り、

四人 お待ち申して居りました。

軍兵 それは嘸お待兼でありましたらう。早速ながら爰においてなさるのは、御大老の織田様の御家中、
豎井郷藏様とおつしやるお方だ。

藤助 これは初めましてお目通りをいたしまするが、軍兵衛殿をもちましてかねぐお願ひ申しまする、
風呂屋藤助にござりまする。

七藏 次に居ります私は、一錢職をいたしまする髮結の七藏にござりまする。

勘七 又私は、京橋で比丘尼宿をいたしまする、勘七と申すもの、

九助 私事は、本所で衣鷹宿の九助と申す、妓夫上りてござります。

軍兵 何分共に、御最辰を、

皆々 お願ひ申し上げます。(ト皆々手を突き辭儀をする、)

郷藏 かねぐは是れなる軍兵衛より申し込んだあらまは、身共も承知いたして居るが、猶もこれにて
直々當人共より承らん。

軍兵 一々それにて願ひの筋を、あなたへ申し上げたがよい。

藤助 へい、先づ私の願ひと申しまするは、當時風呂屋が流行いたし、櫻風呂の紅葉風呂のと毎日

のやうに殖えますので、實は共潰れてござりますから、此の江戸中に何軒と風呂屋の數を取極めて、その餘は新規に出来ぬやういたしたうござりまする。

七藏 今風呂屋が申します通り、髮結床も同じことで、一雨々々數が殖え軒並びで困りますから、どうかこれも風呂屋同様株にいたして何軒と、取極めたうござりまする。

勘七 二人の衆と違ひまして甚だ恐入りますが、比丘尼宿と申しまするは隠し賣女同様な所業をいたしまするゆゑ、兎角くわえんや中間の錢貰ひに困りまするゆゑ、吉原同様御免の場所にいたしたうござりまする。

九助 私事も同じお願ひ、所々へ毎晩出ましても僅かな勤めの二十四文、しがな錢を半分は錢貰ひに取られますから、どうかこれも天下晴れ御免の夜鷹になりますやう、

藤助 一同お願ひ、

四人 申し上げまする。

郷藏 願ひの趣き承知いたした、然し市中は何事も町奉行の掛りゆゑ、表向き書面を以て、その手續きへ願ひ出る、この方からは許すやう奉行へ申し通じてやらう。

藤助 それは有難うござりまする。

七藏 何分成就いたしますやう、

軍兵 いや、それは氣遣ひさつしやるな、豎井さまがあゝおつしやれば最早出来たも同然だ、假令市中の掛りでも御大老から聲が掛れば、どんな事でも町奉行で聞き濟まねばならぬのだ。

藤助 實はお目に掛るまで、何と仰せがあらうかと心配いたして居りましたが、今の仰せを承はり、七藏 一同安心、

四人 いたしました。(ト藤助懷より水引を掛けし金包を出し、)

藤助 もし軍兵衛さま、これは四人がお土産のしるしばかりにお目に掛けます。

七藏 何れ願ひが叶ひました、

勘七 その時こそは、しつかりと、

九助 あなたへお禮をいたします。

藤助 どうぞよろしく、

四人 お取次を、

軍兵 承知しました。只今お聞きなされます通り、あなた様へ此の者共が、今日のお土産のしるしばかりに差上げたいと申します。何卒お納め下さりませ。(ト郷藏の前へ出す。)

郷藏 そんな心配はよせばよいに、然し折角の心配を無にするも本意でなければ、今日は受納いたすぞ。

ト戴いて懷へ入れる。

藤助 お納めなされて下さりますれば、まことに有難う、

四人 存じまする。

軍兵 まだ此の外に頼まれたお願い筋がござりますれば、見晴しへ参つて一獻差上げ、ゆるりと申し上げませう。

郷藏 身共も左様存じたところ、早く参つて一杯やらう。

軍兵 お前方も旦那のお供をして、一緒に行くがよい。

四人 それは有難うござります。

郷藏 然し軍兵衛、天窓がふえては、

軍兵 そこは吞込んで居りますから、其の御心配には及びませぬ。

郷藏 それで身共も安心いたした。

軍兵 左様なれば、豎井様、

郷藏 皆も一緒に、

藤助 お供いたすで、

四人 ござりまする。(トお梅出來り、)

お梅 もうお立ちでござりまするか。

軍兵 茶代は爰へ置きましたよ。

お梅 はい、有難うござりまする。

ト臺拍子になり郷藏先きに、軍兵衛四人附いて上手へ入る。お梅は内へ入る。花道より撫子文金島田振袖小姓装にて出來る、跡より奎助紺看板一本さし、中間装にて風呂敷包を持ち出來り、花道にて、

撫子 これ奎助、向うが神田の明神さまかいの。

奎助 はい左様にござりまする、向うがお宮でござりますからお参りをなされましたら、よい見晴してござりますゆゑ、茶見世へお休みなされまして、お袋様のお出でなさるをお待ちなさるがよろしうござります。

撫子 ほんに母様は、明神下の澤の井へお寄りなされましたが、まだお見えなさらぬわいの。

奎助 今においてなされませうから、先づ御参詣なされませ。

ト右の鳴物で舞臺へ来る、此の時上手よりづぶ六、ぐづ八紺看板一本さし中間装一升徳利を縄にて提げ、酒に酔つたる思入にて出来る。撫子これを見て氣味悪き思入にて避けようとするを、態とその方へ寄つて来て、ト行當り、

づぶこれ、何ておら達に突き當るのだ、見りやア盲目でもねえやうだが、

ぐづこの廣い往來中で、突き當るといふがあるものか。

撫子これは粗相をいたしました、お許しなされて下さりませいな。

づぶいやく、許すことはならねえく。

奎助これはしたり撫子さま、突き當つたは向うから、此方で粗相をしましたとあやまる譯はござりませぬ、向うて粗相をしましたと、あやまらねばならぬのだ。

づぶなに、こつちであやまらにやあたねえのだ、途方もねえことを吐かしやあがる、此の娘が男に見惚れ、うつかりして突き當つたのだ。

見惚れ、うつかりして突き當つたのだ。

ぐづそれを此方で粗相をしたと、あやまる奴があるものか。

奎助はて突き當つたはそつちから、あやまるのは當りまへだ。

づぶまだそんなことを吐かしやあがるか、穴ツ端へ腰を掛けてる死損ねえの親仁だから、相手にする

もみつともねえ、

ぐづ そんな言ひ掛けを仕やあがりやあ、丁簡ならねえぞ、どうするかうぬ見やあがれ。

ト兩人立ち掛るを撫子留めて、

撫子 供の者の申し過ぎも、元の起りは私ゆゑ、粗相をお詫び申しますから、どうぞお許し下さりませ。
づぶ お前のやうに言ひなさりやあ出合頭のことだから、粗相の詫をしなさりやあ、丁簡しねえと言やあしねえ。

ぐづ それを此の爺いのやうに突き當りもしねえものを、突き當つたと言はれちやあ、癪に障つて丁簡ならねえ。

奎助 まだそんなことをいふか、突き當つたから突き當つたといふのだ。

撫子 あ、これ、そなたが口を出しては濟まぬ、何にも言はずに黙つて居や。

奎助 それだと申して、

撫子 はてまあ、黙つて居やいなう。

奎助 へえ。

撫子 定めてお腹も立ちませうが、年寄のことゆゑに、どうぞ許して下さりませいな。(ト二人に詫びる。)